

学位取得への道

—学修と仕事の両立—

佐々木 弘 記 *

1. はじめに

連合大学院開設20周年を飾る記念誌に、6年間かけてやっと学位を取得した不出来な私が投稿するのは大変おこがましいとは承知しております。しかし、私の学位取得までの道のりを紹介する事が、現在、思うように研究が進まない、あるいは進める事ができないと感じている現役の学生の皆さんに対して少しでも励ましになるのではないかと思います。特に、仕事を持ちながら学修されている方々には、ある面、他山の石として参考になるのではないかと思います。

さて、「学修」についてですが、私は2012年3月に博士（学校教育学）の学位を取得しました。研究主題名は「教育センターにおける反省的実践家としての専門的力量形成を目指した教員研修に関する研究」です。連合大学院学校教育方法連合講座に入学したのが、2006年4月ですから、丸6年間かかった事になります。課程入学後、3年で単位取得退学し、退学後の3年目にタイムリミットぎりぎり論文を提出し、論文博士として学位をいただきました。

一方、「仕事」の方ですが、連合大学院に入学したのが、岡山県教育センターの指導主事になってから7年目の事です。今から思えば、もっと早く入学すればよかったと悔やまれるところですが、後悔先に立たずです。連合大学院を3年で単位取得退学するのと軌を一にして、岡山県内の公立中学校に教諭として転出しました。本稿においては、教育センター指導主事の3年間と中学校教員の3年間に分けて、それぞれの仕事と学修の両立について述べたいと思います。

2. 学修と仕事の両立

博士課程に入学した学生は、皆さん3年間で博士論文を書くつもりだと思いますが、私も同じでした。しかし、いかんせん6年かかってしまいました。そこには、自分の論文執筆の力量不足だけでなく、自分の力ではどうにもならない事情もありました。

(1) 教育センター指導主事の3年間

大学院に入学した2006年には、教育センター（2007年に吉備中央町へ総合教育センターとして移転）と配属大学である岡山大学が同じ岡山市内にありましたので、授業へは出席しやすい状況でした。フレックスタイム制度を利用して、教育センターでの仕事後の夕方、岡山大学で授業科目を履修しました。また、授業の後に論文作成に向けた指導を指導教員から受けました。学位取得へ向けた計画としては、定石通り翌年の5月にA論文である「教育実践学論集」へ投稿します。そして、採録が決定、すなわち1本目のA論文が確定すればすぐに博士候補試験を受けます。それと並行して、研究実践をしながら2本目の論文を執筆し、2年目後半にA論文である「日本教師教育学会年報」へ投稿します。そして、採録が決定すれば、学位論文提出の条件が整いますので、博士論文にまとめて提出し、最終試験に臨む、という予定でした。

実際のところは、大学院入学時には教育センターの指導主事の仕事にも慣れていて、文部科学省からの研究助成金を取ってきて色々なプロ

* 中国学園大学（2012年論文博士）

ジェクトを進めており、自ら自分の仕事を忙しくしているような状態でした。教育センターの仕事に追われ、なかなか博士論文の執筆をする時間が見出せませんでした。博士課程に入学したからと言って、自然に論文が書けるようになるものでもありません。研究計画では、「技術的実践」モデルの研修と「反省的実践」モデルの研修を教育センターで実践し、教師の力量形成を比較する予定でした。「技術的実践」モデルの研修としては、グループモデレーションという手法に着目していました。グループモデレーションとは、イギリスやオーストラリアなどの海外で、評価の調整を行うために取り入れられている手法で、同じ単元の同じ授業での評価資料、例えば児童生徒が書いたワークシートや作った作品などを持ち寄って協議を行います。我が国では私が初めて教員研修に取り入れたと自負しております。

1年目の後期になった頃、指導教員から研究の進捗状況を問われて、『技術的実践』モデルの研修は実践できているのですが、『反省的実践』モデルに方がまだ・・・と答えました。それを聞いて指導教員は、きっと「このままでは来年実践学論集に投稿するのはおぼつかない」と思われたのでしょう。「グループモデレーションを『反省的実践』モデルの研修として捉え直してみてもどうか」とアドバイスをくださいました。そのような視点は当時の私には全くありませんでした。そこで、グループモデレーションを新たな枠組みで捉え直し、論文にしたのです。そして、2年目の5月に「教育実践学論集」へ投稿して受理され、A論文1本を獲得しました。一方、実践学論集への投稿と並行して、教育センターの長期研修員を対象とした実践研究に取りかかっていました。教育実践研究を通して長期研修員がどのように反省的実践家としての力量を形成していくか調査するものです。長期研修に来られる先生方はやる気のある人ばかりで、研究に快く協力してくれました。そんな折り、まさに晴天の霹靂、指導教員が他大

学へ移られる事になりました。そして、同じ教育方法講座の別の指導教員の所に11月頃に移りました。その指導教員に、博士候補試験の受験を申し出たのですが、よい返事をもらえず、更に、研究主題をICTに関するものに変えるように言われました。学生という立場上指導に従わざるをえませんが、これは不採択となってしまいました。

一方で、海外での発表を強く勧められ、研究分野が合致する国際学会があれば手当たり次第、申し込んでいました。結局、国際学会の原稿提出のファイナルコールに追われるようになり週末や休日には、徹夜で原稿を書いて締め切り直前に提出するという日々でした。5本の国際学会の発表論文を書き、実際にウィーンとシンガポールで研究発表をしました。国際学会にフルペーパーで発表していれば、A論文1本と認められるという定かでない情報を頼りにしつつ海外発表に力を注ぎました。苦難の中での光明としては、ゼミには同じ博士課程の学生がおり、この方と励まし合って論文を書いた事です。この方は現在大学の教員をされていますが、今も一緒に共同研究を行っています。

更に、最終年度の1月に国際インターンシップの制度を利用して1週間程度、海外学術調査に出かけました。アメリカの教員の専門的力量的形成について調査するものです。ワシントンDC近くのフェアファックスという地区と、15年ほど前に私が文部省若手教員海外派遣で行ったオレゴン州の2地区に調査に訪れました。小学校3校、中学校3校、高校1校を訪問し、25名の校長や教員にインタビューをしました。研究調査の成果も去る事ながら、特にこの調査を通して身に付いたのは、海外において単独で、しかも英語での調査研究を遂行する技量と度胸です。また、15年ぶりにホストファミリーと再会できたのも幸せでした。

さて、国際学会のフルペーパーでの受理もあつ

たので、とにかく3年目が終わる前に博士候補試験を受け、その後単位取得退学をしようと考えていました。そのような中、2度目の晴天の霹靂、指導教員が退職されるとの事です。急遽ICTの研究を中断し、ひっそりと続けていた長期研修員を対象にした研究をまとめ、「日本教師教育学会年報」への投稿へ向けて論文を執筆する事にしました。締め切り間近にシンガポールに国際学会の発表に行きましたが、観光もせずにホテルにこもって投稿論文を仕上げた事が思い出です。一方で、どうにか博士候補試験を受験できる運びとなりました。年度末の慌ただしい中、審査会で提示するプレゼンや資料を作成し、博士候補試験に臨みました。このようにして博士候補試験に無事合格し、3年間で博士課程を単位取得退学しました。

以上、指導主事の仕事と学修の両立を振り返ってみると、指導主事の仕事イコール研究主題「教師の専門的力量形成」であり、とても幸運な時期であったと思います。しかし、センター勤務中に学位を取得しようと思っていたもくろみは潰えてしまいました。

(2) 中学校教員の3年間

2009年春に、9年間勤めた教育センターから公立中学校へ転勤となりました。転任校から進路指導主事との内示があり、4月1日の企画会議に呼ばれました。会議では、第3学年の学級担任も兼務との事でした。部活動は剣道部顧問で、剣道の経験者を待ち構えていたようです。慣れない職場で四苦八苦している5月頃に、投稿していた論文に修正意見がついて戻ってきました。既に博士課程退学後ではあったのですが、元副指導教員の住野教授に連絡をとり、夕方にご指導の時間をいただいで修正を重ね、どうにか受理されました。退学後にも懇切丁寧にご指導くださり、本当に感謝の念に堪えません。A論文が2本そろったので、博士論文にまとめ始めればよかったのですが、進路指導主事の業務、学級担任の仕事、部活動の放課後・土日の練習・試合、更に中学校教育研究会

部会長としての事務仕事に忙殺され、全く時間がありません。健康を損ねては身も蓋もないと思い、論文執筆は一時休止です。よって、この時期は仕事と学修が全く両立できなかった時期だと言えます。

中学校2年目には第1学年の学級担任になり、学校にも慣れてきて、博士論文を書く時間ができてきました。人間不思議なもので余裕があると欲も出るのです。「あと2年ある」と思うと、博士論文を充実させるために、もう1本A論文をねらおうという気になり、再び学会誌への投稿へ向けて論文を作成し始めました。しかし、残念ながらこれは不受理になり、やっとふんぎりがつきました。そこから、A論文2本を軸にして本格的に博士論文にまとめ始めた次第です。

論文作成には時間がかかります。授業の空き時間に少しずつ書けるようなものではありません。論文執筆モードに頭を切り換えるのにも時間を要します。時間を生み出すには、睡眠時間を削るしかありません。まさに、睡魔との戦いです。また、長時間熟考した末、論文の展開にいい考えが浮かんだ、と思い文章を書き始めると、もうその考えは既に書いていた事に気付くなど堂々巡りになる事がしばしばでした。ノートに克明に思考の変遷をメモしておく事が大切だとつくづく思います。しかし、そのノートをどこに置いたか忘れてしまう事もありました。そして、中学校勤務3年目の10月頃に岡山大学に連絡をとり、尾上教授に博士論文審査を引き受けていただく事になりました。そこで再び住野教授に連絡をとり、論文のご指導をいただきました。博士論文はA論文の寄せ集めではない事、また、当然の事ではありますが、全体を通して目的－方法－実践－評価を貫く筋を通す必要がある事を指摘されました。一本筋を通すと、所々に修正や調整が必要となってきます。その辺りにもかなりの時間を要しました。また、引用・参考文献についてもその都度整理しておくのが賢明です。後でやろうとすると改めてそ

の引用部分を原書から探す事になり、余分な時間を費やしてしまいました。最も苦痛であった事は、研究が進めば進むほど、自分の研究にほころびが見えてくる事です。新たな知見が得られたと確信していたのに、調べている内に先行研究で既に指摘されていた事が分かったり、論理的に整合していないところに気付いたりする事です。例えるなら、登山で山頂に近づけば近づくほど、視野が広がり、景色がよく見えるようになってくるイメージでしょうか。

そして、博士論文を提出し、2012年2月に学位論文審査会・公聴会を迎えました。審査会では、かなり手厳しい意見を拝受し、最終試験（口頭試問）でも返答がしどろもどろでした。試験後に審査員の先生方で最終審査が行われるのですが、結果を待つまでの時間がとても長く感じられ、不合格あるいは再審査になるのでは、という不安がよぎりましたが、どうにか合格する事ができました。しかし、合格したからといってそれで終わりではありません。修正意見も多々いただいたので、論文製本へ向けて原稿の修正を行って行かなくてはなりません。これにもかなり時間がかかり、製本した論文を提出するのが締め切り直前になってしまいました。3月には兵庫教育大学での博士学位授与式に出席し、学位記をいただいて学位取得の実感がわいてきました。更に学位取得を実感したのが、大学への公募結果の変化です。それまでは、大学教員の採用に応募しても書類審査で落ちていましたが、学位取得後は二次面接へ進めるようになりました。いくつかの大学に応募し、現在の大学に採用されたのを機に、中学校教員を退職しました。

4. おわりに

大学に赴任して4年が過ぎようとしています。一番ありがたい事は、個室の研究室がある事です。これほど研究や仕事に没頭できる空間はありません。大学では教職科目である教育課程総論、特別

活動論、教育方法学などを教えていますが、小学校教員養成コース担当という事で、採用試験への対策講座を申し出て、一人でも多くの学生が合格できるように力を注いでいます。毎年、少しずつではありますが採用試験に合格する学生が増えてきて、ともやりがいを感じております。一方、研究者としては、幾分歳をとったルーキーのため、同輩に後塵を拝しております。よって、積極的に学会に参加したり、研究助成に申請したりするよう心掛け、少しでも追いつくように努力しています。

ここで、大学教員を目指す学生の皆さんに一言アドバイスです。規模が大きい大学だと、自分の専門とする科目だけを授業で教えればいいのですが、私の大学のように小規模の大学では、多くの科目を担当しなければなりません。ですから、今から専門をあまり細かく限定せず、幅広く研究をしておくのがよいのではないのでしょうか。

最後に、私事で恐縮ですが、私は長年極真空手を修行しており、常々師範からこう言われています。黒帯を締めるのは黒帯の実力があるのではなく、黒帯の実力になっていく努力を続けていける人だと認められたからだと。同じ事が博士の学位取得についても言えると信じています。「博士の学位を授与された時点で博士の実力があるのではない。博士の学位の実力になっていく努力を、今後最大限惜しまないで続けていける人物だと認められたのだ」と。学位取得は最終ゴールではなく、新たなスタート地点だと思っています。

－付 記－

この原稿は、2014年12月に開かれた連合大学院学生研究発表会において同じタイトルで講演を行った内容をまとめたものです。